

ワールドカップラグビーと植物

—強い国の紋章（エンブレム）は植物—

投稿：宮井 正彦

9月20日の「日本」v s 「ロシア」を皮切りに開幕した日本開催の第9回ラグビーワールドカップ2019は、11月2日の決勝戦「南アフリカ」v s 「イングランド」をもって全ての幕を閉じた。大会中、台風19号の影響で予選ラウンド40試合中3試合が中止されたが、予選順位には関係なく、決勝戦に8チームが進んだ。特筆すべきは「日本チーム」で予選Aグループを4戦全勝1位で突破し、決勝ラウンドに進み、初の8強入りした。準々決勝のv s 優勝チーム「南アフリカ」では、敗れはしたが、「日本チーム」は「ONE TEAM」を掲げ、全ての対戦相手に対し、堅固なスクラム、素早い出足のタックル、フィジカル面の劣勢をカバーしたダブルタックルや素早いパス回し、ロングパス、オフロードパス、ときに、相手を翻弄させるキックパスなど多彩な相手の裏を突くアンストラクチャープレーは実に見事であった。大会規約により「日本チーム」のメンバー31名のうち15名が外国生まれであったが、リーチ・マイケル主将をはじめニュージーランド・トンガ・サモア・南アフリカ・オーストラリア・韓国出身の全てが日本人より日本人らしさを発揮して、チームの勝利に貢献する姿に感動した。少子高齢化する人口減の日本にとって国際化した将来の日本はこうなって欲しいと思われた方も多かったのではなかろうか？

「南アフリカ」がニュージーランドに並ぶ3度目の「ウェブ・エリス・カップ」に輝いた。予選ラウンドで「ニュージーランド」に敗れたものの決勝戦では、「ニュージーランド」を破った「イングランド」を下して優勝した。上位チームはほとんど力の差はみられず、ちょっとしたミスやペナルティーでゲームの流れが変わる団体スポーツ特有の妙を味わうことのできた大会であった。

小生も埼玉県熊谷ラグビー場で「アルゼンチン」v s 「USA」の予選試合を観戦する機会を得て、学生時代齧ったラグーマンの気分になることが出来た。

日本を熱狂の渦に巻き込んだ「ラグビーワールドカップ2019」は、テレビ視聴率でも驚きの結果であった。ラグビー・ルールの理解すら不十分の中、NHK総合TVでBSから急遽変更放映された10月20日の準々決勝「日本」v s 「南アフリカ」戦は平均視聴率41.6%（関東）、瞬間最高視聴率は49.1%（関東）を記録した。日本テレビ放映のAグループ最終決定戦「日本」v s 「スコットランド」戦は平均視聴率39.2%、瞬間最高視聴率は53.7%を記録した。いずれも今年度放映された全番組で断トツの結果だそうである。ひたむきにボールを追う「One for All All for One」（一人は皆のために、皆は一つの目的（トライ・勝利）のために）や「No Side」（試合後は敵・味方の区別がなく、互いに健闘を称えあう）のラグビーの持つスポーツ精神が共感を得られたのだろう。また、台風被害で落ち込む世相を勇気づけてくれた大会でもあった。

世界各地で勝ち抜いてきた参加20ヶ国はいずれも地区代表として素晴らしいチームであった。それぞれのチームに愛称と紋章（エンブレム）があり、ユニホームの左胸には国

を代表する誇り高いエンブレムが付けられている。その紋章に植物をデザインしたものが実に多い。参加国20ヶ国中11ヶ国が何らかの形で愛称やエンブレムに植物を取り入れている。そのことには、国別に後半の各国編で触れてみたい。

ワールドカップ出場20ヶ国の内、「植物」を取り入れたエンブレム（11ヶ国）

1.南アフリカ（*1）



2.イングランド（2）



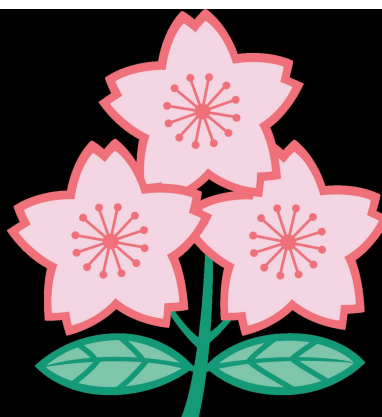
3.ニュージーランド（3）



4. アイルランド（5）



5.日本（8）



6.スコットランド（9）



7.フィジー（11）



8.トンガ（13）



9.サモア（15）



10.カナダ (22)



11.ザンビア (23)



**英国 (イギリス)



* () 内の数字は最新のラグビーワールドランキング

** 英国とは:「United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland」「イングランド」、「スコットランド」、「ウェールズ」、「北アイルランド」の4つの「国 (country)」から構成される「立憲君主制連合王国」北アイルランドは隣接する「アイルランド」との統合チーム「アイルランド」として出場した。EU離脱問題や宗教・人種・経済問題を抱え実に複雑な連合王国である。国花も各国で其々設定されている。「イングランド=チューダーローズ」、「スコットランド=アザミ」、「ウェールズ=ラッパスイセン」、「北アイルランド=シャムロック」である。ウェールズだけはエンブレムに国花を使わずウェールズ家の紋章「プリンス オブ ウェールズ (スリーフェザーズ)」が使われ、愛称は赤いジャージの「レッド・ドラゴン」である。

各国編

1・「南アフリカ」愛称「SPRINGBOKS」エンブレム動物「SPRINGBOK」 &植物「PROTEA」写真1)

スプリングボックは南アフリカを代表するウシ科のトムソンガゼル等と同じガゼル属の草食動物で、その優れたジャンプ力・運動能力から、「スプリングボックス」の愛称で呼ばれる。それをデザインしたエンブレムにしていたが、今回のジャージは、右袖には栄光の優勝カップの刺繍、左の胸には国花である「キングプロテア」をデザインしたエンブレムになっている。白人時代に重用されたスプリングボックのデザインは左裾に刺繍されていたが、アパルトヘイト時代からの自由解放の表れなのかも知れない。今回のチームはコリシ選手(フランカーNo 6)が黒人初のキャプテンを務めた。素晴らしいチームだった。

「キングプロテア」(写真 1) はヤマモガシ目ヤマモガシ科プロテア属の一つで、プロテアは、ギリシャ神話の海神プロテウスに由来する。あまりにも立派で荘厳な花を咲かせることによるそうだ。南アフリカ共和国のシンボリック植物とされ、国花に指定されている。花序の直径は、約 30cm で花期は 4-6 月の常緑低木である。近年は日本でも栽培しているところがあり、生花やドライフラワーとして見る事が出来る。

尚、ヤマモガシ目の仲間はゴンドワナ大陸移動に関与した南半球特有の植物群でもある。

写真 1)「キングプロテア」(Wikipedia より)



2・「イングランド」エンブレムは「**RED ROSE (深紅のバラ)**」チームの愛称はない。十字軍によって西アジアからヨーロッパに広がった「バラ」は家紋に取り入れられた。キリスト教では赤いバラがキリストの血、白いバラは聖母マリアの純潔を表しているそう。15世紀の半ばから約30年間にわたった薔薇戦争(赤いバラの家紋のランカスター家と白いバラの家紋のヨーク家の戦い)は、ランカスター家のヘンリー7世とヨーク家のエドワード4世の娘エリザベスとの結婚で終結し、赤と白を組み合わせたバラの紋章「**チューダーローズ**」となり、紆余曲折を経て現在の国花になっている。しかし、何故か「イングランド」チームのエンブレムは「**深紅のバラ**」なのである。ラグビー発祥のパブリックスクール「ラグビー校」(英国ではパブリックは私立であり、屈指の進学名門校)の紋章中に深紅のバラが描かれていることから、深紅のバラがエンブレムに取り入れられたのではないかとの説もあるが定かでない。その他にも諸説がある。

3・「ニュージーランド」愛称「**ALL BLACKS**」エンブレム「**SILVER FERN**」(写真 2)

ニュージーランドは今大会3連覇を逃し、残念ながら3位に終わった。

チームの愛称は「オールブラックス」。余りに強くて、まるで全員がボックスのように攻め上がることから「**A l l B a c k s**」⇒「**A l l B l a c k s**」になったという説もあるが、やはり、ジャージの上下が全て黒いことから「**A l l B l a c k s**」と呼ばれるのが妥当なのだろう。因みに、ファースト(ホーム)ジャージは黒だがセカンド(アウェイ)ジャージは白である。この場合は、「**A l l W h i t e s**」と呼ぶのかな？

エンブレムは「**シルバーファーン**」。「ヘゴ科」「ヘゴ属」に属する木性シダ。葉裏が白銀色を呈する。マオリ人(先住民族)の信仰対象植物で「前進や躍動の象徴」といった意味を持つ。「**国章**」の最下部のデザインにも使われている。試合前のマオリ族の信仰の戦

いの儀式ウォークライ「ハカ (Haka)」は大会を大いに盛り上げてくれた。特に有名な「**Ka Mate** (カ・マテ)」は現地語で「私は死ぬかも知れない。」という意味だが、昔、最初に聞いた時、小生には「頑張って、頑張って…」と踊っている様にしか聞こえなかった。

写真 2) シルバーファーン (Wikipedia より)



4・「アイルランド」エンブレムは「**SHAMROC (シャムロック)**」 愛称はない。

三小葉の植物といえば、マメ科の「クロバー」や「ウマゴヤシ」そしてカタバミ科の「カタバミ」等である。「シャムロック」そのものは「三小葉の植物」を表す言葉で植物名は定かにしていない。キリスト教の「三位一体」(「父なる神」・「子なるキリスト」・「聖霊」の三つが「一体」になる)を象徴する植物ということで「3枚の小葉で1枚の葉を形成する」これをデザインしたエンブレムである。

5・「日本」愛称「**BRAVE BLOSSOM (勇敢なさくら戦士達)**」エンブレム「さくら」

日本のラグージャージは赤と白のボーダー(横縞)デザイン。今回出場の20ヶ国では、アルゼンチンが空色と白のボーダー以外、全て単色デザインである。世界のラグビー先進・強豪国は単色のジャージなのである。日本にラグビーが浸透したころには他国にワンカラーのジャージが占領されており、他の国と被るカラーのジャージは禁止されているため、日本国旗を連想させるレッドとホワイトのボーダージャージになった。日本中のラグーシャツは殆どボーダー(横縞柄)だった。ボーダーデザインがラグージャージだと信じていたくらいである。そのラグビー後進国日本が、今や、ワールドランキング8位なのである。凄いことである。

エンブレムは「三輪の満開桜の紋」である。「正々堂々と戦い、破れるときには美しく散れ。」という思いが込められているという。何となく戦争高揚歌「同期の桜」が思い起こされ、戦中生まれの小生には些か抵抗を感じるエンブレムである。今大会の最優秀監督の南アフリカ監督ヨハン・エラスムス氏はスピーチで「ラグビーは希望を生む。」という名言述べている。確か、最初の日本代表のエンブレムは「三輪の桜は、つぼみ・半開き・満開の桜」だった気がする。今はつぼみだが、やがて大輪の花を咲かせようとする将来への気概と思いを感じさせるデザインだった。ところで、エンブレムの桜の花が三輪なの

に疑問だったが、日本代表の結成当時は関東・関西・九州の 3 支部だったのでそれを表現したとは味気ない。「心・技・体」とか、「正・明・和」とか意味が欲しい。

6・「スコットランド」エンブレムは「アザミ」 愛称はない。

「エンブレム」はスコットランドの国花「アザミ」である。13 世紀にノルエーがスコットランドを攻めた時、上陸したノルエー兵がアザミの棘のあまりもの痛さに音を上げ侵略を断念したとの逸話がある。「勝利の花」として国花になっている。また、「アザミの花」は「人格」と「高貴」の象徴でもある。キク科アザミ属の総称でアザミという種はない。

ヨーロッパ原産で特に棘の酷い種類を探してみた。アメリカオニアザミが最も近い。

スコットランドの紋章

「アメリカオニアザミ」 *Cirsium vulgare* の棘



(Wikipedia より)



名前と異なりヨーロッパ原産。鋭い棘を持つ。

7・「フィジー共和国」愛称は「Flying Fijians」エンブレムは「椰子の木」

フィジーの伝説の名選手ジョセファ・レブラはスピードと変幻自在のプレーぶりから「フライング・フィジアン（空飛ぶフィジー人）」と呼ばれた。この名手の異名が 15 人制ラグビーの代表の愛称「フライング・フィジアンズ」となったとのだと云う。英国の植民地教育でラグビーが導入され、歴史は古くプロ化している。国技でもある。学校には必ずゴールポスト（下記写真参照）があると云う。ワールドカップでも過去 2 回ベスト 8 になっている。今回 D グループ 3 位で決勝ラウンドには進めなかったが、次回のフランス大会の出場権は確保した。7 人制ラグビーは強く、2016 年のブラジル開催オリンピックでフィジー国初の金メダルをもたらした。

エンブレムは「椰子（ヤシ）の木とラグビーボールを模った椰子の実」である。

「ヤシ（椰子）」は単子葉植物ヤシ目 ヤシ科に属する植物の総称である。熱帯地方を中心

に亜熱帯から温帯にかけ広く分布する。代表する「ココナッツヤシ」は、食料・衣料・家具・仕切りや壁・床・屋根・柱等利用価値が高い。問題のシロアリにも強いこともあり、生活にとって貴重な天然の資源である。ココナツヤシの生産量はフィピン、インドネシアが多いがフィジーも小国ながら 10 番目の生産量を誇る。「エンブレム」はココナツヤシの「椰子の木と椰子の実をラグビーボールに 例えた組合せ」のデザインでフィジーらしい。

フィジーにも試合前の信仰の戦いの儀式ウォークライ「シビ (Cibi)」がある。



ラグビーに興じる子供達とラグビーボールと椰子 （写真 web 読売新聞より）

8・「トンガ王国」愛称「イカレ・タヒ (Ikale Tahi)」エンブレム「白鳩とオリーブ」

「イカレ」は鷲、「タヒ」は海。愛称の「イカレ・タヒ」とは「海鷲」。海洋島にとって「ウミワシ（イカレ・タヒ）」は最強猛禽として崇められナショナルチームの愛称になっている。

エンブレムは国章*に因み「平和とキリスト教を象徴するオリーブを啜えた白鳩」である。



トンガにも試合前に戦いの信仰の儀式の踊り「シピ・タウ (Sipi Tau)」がある。赤いジャージを着て踊る姿は勇壮で、迫力満点である。ニュージーランドの「ハカ」に勝るとも劣らない。

ラグビーはトンガ王国の国技になっているが、残念ながら、日本大会では、Cブロック 4 位となり次のフランス大会への出場権は確保できなかった。

⇐ トンガ王国の国章* (Wikipedia より)

左下に「オリーブを啜えた白鳩」

9・「サモア独立国」愛称「マヌ・サモア」エンブレム「オリーブとヤシと南十字星」

愛称の「マヌ」とは現地語で「獣」の意味で、「マヌ・サモア」は「サモアの獣」のことである。サモアの伝説の勇者の化身の獣といわれる。

エンブレムは「南十字星」を中心に「ヤシの木」&「十字架」それを包む「オリーブ」、まさに南洋の楽園景観そのもののデザインである。

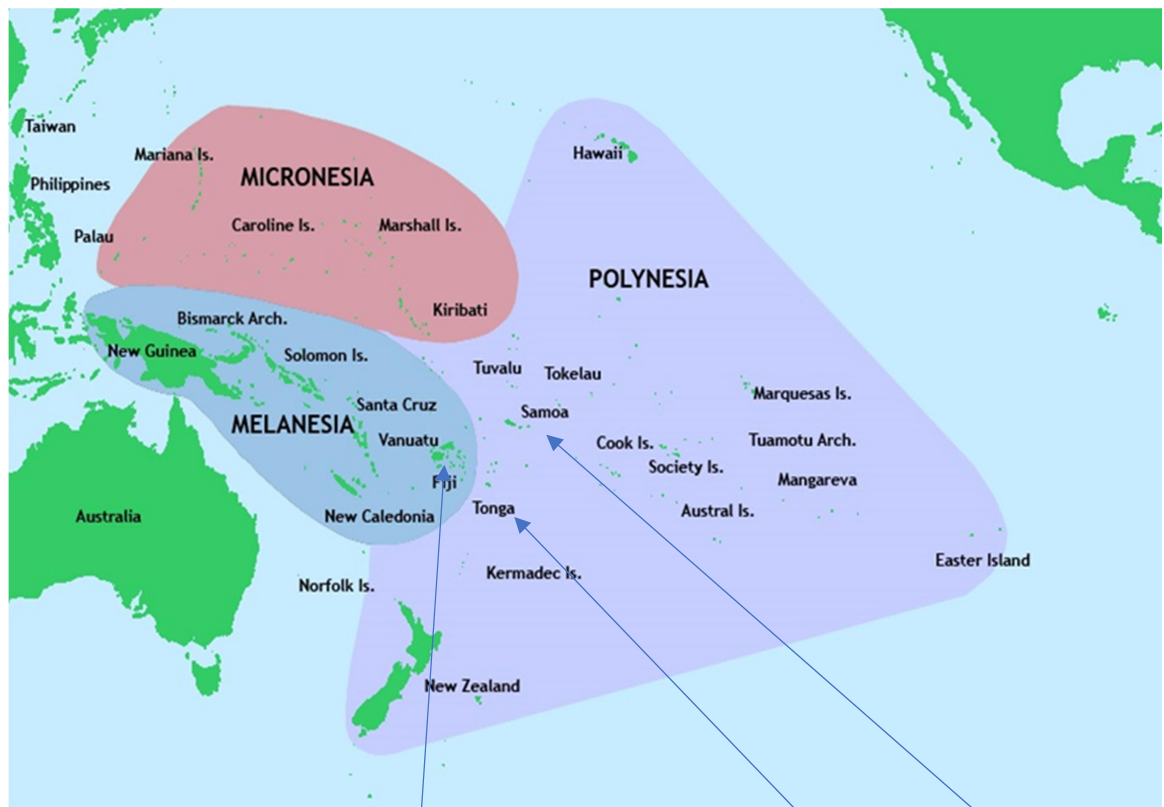
サモアにも試合前の信仰の戦いの儀式ウォークライ「シヴァタウ (Siva Tau)」がある。詩の内容は、「ハカ」に比べるとはるかに勇ましい。「マヌ・サモア」と繰り返しシヴァタウを踊り盛り上げる。

日本大会では、Aブロック4位。次のフランス大会の出場権は確保できなかった。

*参考)

南太平洋の海洋諸島オセアニアの小国の参加国について MAPと国情報

オセアニア（オーストラリア大陸を含む、メラネシア、ミクロネシア、ポリネシア）MAP



赤：ミクロネシア 青：メラネシア（フィジー共和国） 紫：ポリネシア（トンガ王国、サモア独立国）

- ・「フィジー共和国」は300余りの火山島と珊瑚礁からなる群島国家で、メラネシア民族集団の中で過去、英国に統治されていたが、主権国家として1970年に独立し共和制国家となった。人口は約86万人/2012年の小国である。メラネシア民族自体もポリネシアの域外ポリネシアと呼ばれることもある。
- ・「トンガ王国」は169の島からなるポリネシアの主権国家である。一時、英国の保護状態

にあったこともあるが、外国に主権を放棄しなかった誇り高き王国で、2010 年には絶対王制から立憲君主制王国となった。親日国である。人口は約 10 万人/2008 年の小国である。

- ・「**サモア独立国**」は 7 つの島からなるポリネシアの小国。旧「西サモア」でドイツ帝国の植民地であったが、国際連合信託統治領となり英国連邦に加盟。1997 年に「サモア独立国」となる。人口は約 18 万万人/2008 年の小国である。

10・「カナダ」愛称「Maple Leaves」エンブレム「Maple Leaf」

愛称、エンブレムに使われている「メイプルリーフ」はシロップの取れる和名「サトウカエデ」の葉をデザインしたものである。

ムクロジ目ムクロジ科カエデ属 和名「サトウカエデ**」（学名 *Acer saccharum* ）

英名: Sugar maple である。((カエデは従来クロンキスト体系及び新エングラータ体系の分類で「カエデ科」とされてきたが、最新の DNA による APG III 体系分類では、カエデ科はムクロジ目ムクロジ科カエデ属と格下げされた。))

カナダを含む北アメリカ北東部が原産で、樹高 30～40 メートルになる高木。日本のカエデと比べるとかなり大きい。カナダを代表する「国花」とされ、国章・国旗にデザインされているほか、メイプルリーフ金貨などの硬貨にも取り入れられている。アメリカ合衆国北東部のニューヨーク州など 4 州では州の木ともされている。*メイプルリーフのデザインには「**カナダの国の象徴**」との意味が込められている。葉の尖った部分と葉柄の数 12 は、国を構成する 10 州と 2 準州を表す。国旗*の 2 つの赤い帯は太平洋と大西洋、真ん中のメイプルリーフはカナダ国を表す。そして赤は「勇気」、白は「純潔と誠実」を表現していると云う。メイプルリーフは国と勇気の象徴なのである。

*国旗



Wikipedia より)

**「サトウカエデ」の特徴ある葉



秋の紅葉がきれい。

今回の日本大会では、B ブロック 5 位。残念ながら、次のフランス大会の出場権は確保できなかった。

11・「ナミビア共和国」愛称「WELWITSCHIAS」エンブレム「三色海鷲」

ナミビア代表は、植物の「ウェルウィッチア」を愛称に持ち、サンショクウミワシ（アフリカンフィッシュイーグル）がエンブレムである。ナミビア国章に描かれるこのワシの勇姿に戦う勇者を重ね合わせて選ばれたのだろう。愛称「ウェルウィッチアス」も国章に描かれている。世界中でナミブ砂漠にしか生息しない希少・奇妙・貴重な植物である。国をあげて保護してきたことが愛称に繋がっているのだろう。

「ウェルウィッチア（学名：*Welwitschia mirabilis*）」は、裸子植物グネツム綱グネツ目ウェルウィッチア科の1科1属1種の植物である。オーストリア人の発見者の名前に因んで付けられた種名である。ウェルウィッチア科植物の白亜紀前期の化石が南米で見ついていることから化石植物とも云われる。アフリカの大西洋岸のナミビアの北部に隣接する「アンゴラ」から「南アフリカ」の北端にかけて広がる世界最古の砂漠「ナミブ砂漠」のみに分布する。不思議な植物で、生長点が葉の付け根にあり1対のみの葉を伸ばし続ける特異な形態を持つ。葉は最長で20mに及ぶものもある。写真では付け根から数枚の葉が出ているかのように見えるが、砂漠の風で葉の先端が縦に引き裂かれたもので2枚だけなのである。砂漠には動物・微生物が少ないため、葉が食されることも分解されることも少く長寿なのである。雌雄異株でもある。また寿命は非常に長く1000～2000年といわれる。和名はサバクオモト（砂漠万年青）やキシウテンガイ（奇想天外）と呼ばれる。小生が50年ほど前にアフリカを旅する機会があり、是非見たいと思ったが叶わなかった植物である。現在は日本では京都府立植物園で見られる。ナミビアは南アフリカの委任統治下にあったため、ラグビーの歴史は古く、アフリカで実力は2位だが殆どがアマチュア選手のために、ワールドカップで6回出場するも、日本大会も、ロシア戦が台風で中止されたこともあり勝利することが出来なかった。

「ウェルウィッチア（*Welwitschia*）」

「ナミビア共和国」



Wikipedia より)

赤：ナミビア 北上：アンゴラ 南下：南アフリカ

リカ

以上

—おわりに—

第9回ワールドカップ日本2019は「史上、最も偉大な大会であった。」と称賛総括され、成功裏に閉幕した。この間、日本中が元気づけられた。「ワンチーム」、「俄かファン」、「ジャッカル」、「オフロードパス」、「アンストラクチャー」等、ラグビーから新しい流行語も誕生した。最近では、「ラグビーロス」なんていう言葉も囁かれている。

第10回ワールドカップ2023は4年後にフランスで開催される。出場国は20ヶ国である。日本大会の決勝ラウンドに進んだ8チームと予選各グループ3位の4チーム計12ヶ国が次回フランス大会の出場権を得た。残りの8ヶ国の出場資格は、改めて8の出場資格予選で選抜されことになる。

Aグループ：日本・アイルランド・スコットランド・サモア・ロシア

Bグループ：南アフリカ・ニュージーランド・イタリア・ナミビア・カナダ

Cグループ：イングランド・フランス・アルゼンチン・トンガ・アメリカ

Dグループ：ウェールズ・オーストラリア・フィジー・ジョージア・ウルグアイ

*黒太字は決勝ラウンド進出国（8ヶ国）

黒細字は決勝ラウンドに進めなかったが、フランス大会出場権を獲得した国（4ヶ国）

赤細字はフランス大会の出場権を得られなかった国（8ヶ国）

2021年には、初の「第1回女子ラグビーワールドカップ」がニュージーランドで開催されることになっている。

ラグビーに感謝！

—終—